

You Can't Be a Child Again: *Look Homeward, Angel*と家族

関 真彦

“Where now? Where after? Where then?” (223) —これは、小説中盤、W.O.Gantが一瞬時が凍りついたように止まるのを感じ、そのあと語り手が投げかけた問いかけである。このフレーズは何度も繰り返されることになる。小説が描き出した誰かの一瞬、その一瞬が過ぎたあとその人は何をしているのか、テキスト上から消え去ったその時間を我々はどのように考えればいいのか、そういう疑問がこのフレーズの背景にある。

この言葉は*Look Homeward, Angel*においてThomas Wolfeが描こうとしたもの、子供時代の家族についても当てはまるように思える。一般に、人は青春時代を経て、子供時代の家族関係から卒業することになっている。フロイトはそう簡単にそれから縁が切れないことを示したが、それでも、精神分析や心理学では、基本的に子供時代の家族関係は、人が大人になるにしたがって背景化し、大人は表面上は家族の成員たちと個人として、ある程度の距離を保った付き合いをするとされる。

この論において、基本的に私が参照しているのは、エマニュエル・トッドの提示する家族モデルである。彼の家族モデルは、アルチュセールやフーコーの提示するような、あるイデオロギーの教育の場としての家族というモデルに、心理学の成果を付け加えたものである。彼はヨーロッパの家族を四つの類型に分類した上で、アメリカやイングランドは絶対核家族が基本であり、成人が親元から離れるのが一般的であると言う。そして家族によって人は「親子・兄弟など基本的な人間関係を定義する親たちの諸価値を無意識のうちに深く内在化」し、これは「意識的な言葉による公理化を必要とせず、論理以前のところで機能」するとする(50)。この「論理以前のところで機能」する「諸価値」は、学校などを通じて教え込まれるイデオロギーと対比されている。これは、エリック・エリクソンなどの心理学者たちが提示している構図を踏襲しているものだ。ことにアメリカのような絶対核家族の社会では、家族関係によって育まれた「諸価値」は「無意識」の領域に入り込むものとされる。それは顕在化し、声高に語られるようなものとはみなされていない。

人は成人になったとき、子供時代の家族とある程度の距離を保つものである。逆に言うと、そうでなければ普通は大人になったとはみなされない。こういう近代的人間の成長過程を、しかし、通常のやり方でたどらなかった場合、人はどうみなされるか。そして彼の書いた作品はどのようなものになり、どのような評価を受けるか。これが本論の

テーマである。

本論では、Thomas Wolfe の *Look Homeward, Angel* について論じる。¹ とりわけ、「過去」の「家族」の扱い方が問題となってくる。「過去」や「家族」という主題は、当時の小説としては多分に典型的である。Allen Tate が言うように、「過去」への強い意識は南部作家に共通したものであるし、²フロイト以降、「家族」、特に子供時代の家族関係の考察に重点を置く小説は多くなった。しかし、この小説は、それらの題材の扱い方において独特である。Wolfe とそれら題材との間の距離は、彼の小説を理解する上で非常に重要である。まず、この「距離」についてどう考えられてきたか概観した上で、それが彼の小説の内容や形式に与えていった影響について考えていきたい。

二つの「教養小説」

Thomas Wolfe の小説への批判のうち、最も目に付くのが彼の「稚拙さ」「未熟さ」についてのものである。“Thomas Wolfe: Time and the South”において Louis Rubin Jr. は Wolfe は彼の題材との間に Faulkner や Fitzgerald と違って客観的距離を保てなかったために主観的な、感性のみの描写となったと批判する。また Robert Slack や Clyde Clements Jr. は後期の Wolfe 作品が示す社会への興味を、青春の自己中心性からの脱却として評価している。これについては Richard Walser が、Wolfe の最後の小説 *You Can't Go Home Again* 出版の際の批評家たちの反応をもとに述べている通りである。³

だいたいにおいて、Wolfe の未熟さとして批判されるのは、彼の小説が、特に *Look Homeward, Angel* が、自伝と三人称小説と叙事詩の混合のような奇妙な形式をとっていること、作者が小説の主人公や題材との間に十分な“aesthetic distance”をとっていないこと、⁴そして自分やその身の回りのことばかり書いて、社会に目を向けようとしないこと、である。最初の批判についてはうなずけるところはあるものの、“Wolfe's Fiction: the Question of Genre”においての Richard S. Kennedy のように Wolfe の小説の形式を“fictional thesaurus”と呼び、その可能性を前向きに検討しようとする試みもある。そして Shawn Holliday が指摘するように、Wolfe の“craftmanship”の欠如、その作品の冗長さを批判し、のちの Wolfe 批評に大きな影響を与えた Bernard DeVoto の“Genius Is Not Enough”はニュークリティシズムの強い影響下で Wolfe の作品を裁断したものであった。また、あとの二つに関しては必ずしも Wolfe の文学上の未熟さを意味しない。“The Ideology of Modernism”においての Lukacs のようにモダニスト作家に通底する、社会に背を向け個人の心理などを探求する傾向自体を批判するならまだしも⁵、前述した批評家たちは特にそのほかの同世代の作家たちの批判はしていない。確かに Wolfe は「自分の物語」を書いているという印象を強く与える作家だが、「社会への興味」に関して言うならば、Wolfe のみが非常に希薄であるというわけではない。そして、Wolfe の小説においては、作者と題材あるいは主人公との“aesthetic

distance”がほとんどないように見えるが、それがあるように見えるから文学的に成熟しているという意見にはほとんど根拠がない。

おそらく、こういった考え方の背景には、Wolfeとその小説の抱える特殊な事情がある。彼は長編第四作目までは基本的に自伝的小説を書いていた。そして、いわゆる教養小説の形式をとった第一作の *Look Homeward, Angel* 以降も、基本的に小説は作者自身とおぼしき主人公たちの成長を追う。それらが自伝的小説である以上、読者はその背景に作者自身の成長も期待し、それを見るようになる。いわば、小説だけでなく、作者 Wolfe 自身もいつの間にか教養小説の主人公として劇化されていくのだ。この姿勢を最も明瞭に表しているのが Louis Rubin, Jr. であり、かなり多くの批評家たちが彼と同じ姿勢をとっていると考えられる。

The “form” of the Wolfe novels is, therefore, the principle of development that carries the autobiographical protagonist from immaturity toward maturity, from rebellion toward acceptance, from romanticism toward realism. The social consciousness, the discovery of America's true greatness, are both parts of this larger development. It is a progression from an anguished, first-person art toward the kind of artistry represented in *The Hills Beyond*: third person, objective, representational fiction. A progression, in other words, away from autobiography, through autobiography. (*The Weather of His Youth* 25)

こう言うとき、もちろん Louis Rubin Jr. は小説の主人公と作者双方の成長を含意している。その上で彼は、小説の主人公たちや Wolfe 自身の変化を、成長という一つの直線的な軸に乗せて説明してみせる。ただし、なぜその変化が成長であると言えるのか、本当にそこに成熟はあるのか、といったことについて彼は明らかにしていないし、おまけに最後には *Look Homeward, Angel* が一番面白いと述べるなど、いったいどういう意味での成長なのかということは不明のままである。この、Wolfe および彼の主人公たちの変化に「成長」や「成熟」を読み取ってしまうという傾向は、Wolfe 作品にひそむある問題が誘発していると考えられる。

こうした見方は Wolfe 自身もある意味で後押ししているものだ。 *You Can't Go Home Again* の最後で、主人公は Wolfe が Scribner と契約していたときの編集者 Maxwell Perkins をモデルとした Foxhall Edwards への手紙において、すでに Edwards のような父的な存在を必要としなくなったこと、それまでの自分は自己にばかり目を向けていたが社会に目を向けることの必要性を学んだこと、などを主張している。さらに *You Can't Go Home Again* というタイトルは、それまでの Wolfe の一大テーマであった彼の“home”からある距離を保つことを示唆している。このような Wolfe の姿勢は、彼の創作活動を成長という面から見ようとする批評家たちに歓迎されるもの

であった。しかし、Wolfeのこの宣言は、彼がこうした批評家たちの考え方をついに受け入れただけとも考えられる。Richard S. Kennedyは、Wolfeが文学上の成熟のために、自伝的な要素をできるだけ排除していこうと試みていたと言う。⁶ そうだとすれば、単にWolfeは批評家たちの望むものを提示してみせただけにすぎない。実際、WolfeはMargaret Roberts宛ての手紙において、彼が今までより“objective”な小説を書いていること（これは*The Web and the Rock*と*You Can't Go Home Again*にまとめられることになるエピソード群のことである）、そしてそれは“it will meet the objections which some of the critics have posed about my being an autobiographical writer”（*The Letters* 518）であり、それこそが作家として経験を積んだ証となるであろうということなどを述べている。

*Look Homeward, Angel*がいわゆる教養小説の枠組みを採用したことで演出される主人公の成長と、その作者の成長、この二つの成長をしかし台無しにするような要素を小説は抱えている。主人公の「成長」が時の流れとともにたどられながら、その「成長」に疑問が投げかけられているのだ。それはWolfeの批評家やある文学的公準への意識的な反抗というよりは、彼の子供時代の家族や時の流れというものへの意識の持ち方に関わっていると思われる。「成長」を演出しながらそれに逆らうというこの力技は*Look Homeward, Angel*において最も明瞭に見られるものだが、だからこそこの小説が未熟だという評を受けたのかもしれない。以下、この矛盾をはらんだ動きを、家族と時の経過がどのように扱われているかという分析を通して追ってみたい。

*Look Homeward, Angel*と家族

*Look Homeward, Angel*は、何よりもまずEugene Gantの家族についての小説である。小説は家族の描写に始まり、家族の描写に終わる。むろん家族以外を描写している部分もあるが、家族の描写に比べれば、圧倒的に比重は少ない。そしてEugene Gantの描写を中心に据えたこの小説において、十分に描かれている「他人」があるとすれば、それはEugeneの家族の成員である。

この小説はいわゆる教養小説のように見えるが、そうではない。これはHemingwayの短編や初期の長編などとも共通する特徴なのだが、Wolfeの小説は基本的に話らしい話を持たない。彼の創作スタイルは短いエピソードをたくさん書いてそのあとそれをつなげるといったものだったから、Wolfeの死後、それらをつなげる共同作業ができなかったために、Edward Aswellはエピソード群にほとんどなんの関連も持たせないまま編集し、*You Can't Go Home Again*などの小説を出版している。Maxwell Perkins自身も、*Look Homeward, Angel*の手直しをする際、まず最初にやったことはそれに“unity”を与えることであったと言っている（43）。実際、*O Lost*と*Look Homeward, Angel*を比較すると、Eugene以外の人物に焦点を当てた部分や短いエピソードの連なりなどがカットされていることがわかる。Malcolm Cowleyが指摘するように、Wolfe

はどちらかという短編小説作家であったのであり、長編小説としての組み立て方にはあまり頓着していなかった。*Look Homeward, Angel*の教養小説としての枠組みは、エピソード群になんらかの統一を与えるためという理由が大きく、注意深く見ていくと実はそういう外観を裏切る要素がいくつもある。一応、Eugeneが年齢を重ね、最後は家族そして故郷から離れるという形式をとってはいるが、語り手の語る彼の考え方は、それほど変わっていない。後に述べるように、Eugeneは外部の価値観に触れ、それを通して人生についての見解を深め成長していくという筋道を通るのではなく、もっと内向きな論理で家族から離れることになる。何より、小説の形式が、教養小説的な順調な時の流れを保証していない。

Wolfeが基本的には短編小説作家であり、そうしてできた短いエピソードを教養小説的な流れの中につなぎあわせたため、独特の形式を生み出したということについては、小説の中にも、そうしたことを裏打ちするような描写を見つけることができる。Eugeneは、「固定された瞬間」の意義を強調した上で、時をそうした瞬間の連なりのようなものととらえている。この感覚は小説を通して変わっていない。たとえば、15章の始めでは、“He did not understand change, he did not understand growth” (158) と、Eugeneが成長という概念を信頼していない様子が描かれている。その結果、“He stared at his framed baby picture in the parlor, and turned away sick with fear and the effort to touch, retain, grasp himself for only a moment” (158) という描写が続く。彼は、昔の自分の写真を見て、それと今の自分の間に成長という道筋をつけて、アイデンティティーを確認するという作業ができないのである。彼にとって一瞬一瞬は独立しているように思えるため、“the weird combination of fixity and change” (159) は常に頭を悩ませる問題なのだ。こうした“fixity”へのこだわりは随所に見られる。冒頭に挙げた、Eugeneの父が一瞬、時が止まるように感じる場面もそうだし、24章には、“He caught and fixed the instant” (276) で始まる、Eugeneが時を凍りついた一瞬として把握する場面が出てくる。また、29章における母との会話の中で、Eugeneは“I shall remember this. Always this. This” (366) という感想を持つ。このとき彼はのちに思い出すような場面として、一瞬を“fix”しているのだ。そして小説の最後、旅立つ前にBenの幽霊と対話を交わしているとき、Eugeneは以下のような幻想を見る。

There, by the corner in from Academy Street, Eugene watched his own approach; there, by the City Hall, he strode with lifted knees; there, by the curb upon the step, he stood, peopling the night with the great lost legion of himself - the thousand forms that came, that passed, that wove and shifted in unending change, and that remained unchanging Him. (518)

ここでも“fixity”と“change”はいびつな共存関係にある。Eugeneが見るさまざまな自分自身の姿は“unending change”の中にあるのだが、ここでそれらは一つの瞬間の中に並列的に現れている。これは何か一つ、一方向的な時の流れがあるという感覚を否定している。こうした、ある人のアイデンティティーを保証してくれるような順調な時の流れ、つまり成長への懐疑がこの小説の底にあり、そのせいで、編集者 Perkins と Wolfe が小説に与えた教養小説の枠組みを小説自体が否定するような格好になってしまっている。

だが、この小説は決して「人は成長しない」ということを訴えている小説ではない。そもそも Perkins の編集が入る前の *O Lost* はまったく教養小説的ではなかったかという、そんなことはなかった。Perkins がやったことは主に、Eugene の「成長」物語以外の部分をカットしたことであり、元の小説の持っていた一要素を強調したに過ぎない。小説に、Eugene の「成長」を見ることは可能である。だから、時系列に沿った人の成長というテーマがないとは言えないし、それを小説中に認める立場にもそれなりの説得力がある。しかし、小説のいくつかの重要な要素がそれを裏切っているのだ。そして、表では「成長」を言い立てながら、それを裏切っていくというダイナミズムが *Look Homeward, Angel* というテキストを駆動させているものの一つである。大切なのは、この小説が「成長を描こうとしない」ということではなく、いわゆる教養小説が体現するような「通常の成長」を描こうとせず、ある独特のやり方で主人公が年を重ね、物語の終わりにたどりつくということである。

それでは、このような事情を抱える小説において、主人公はどう教養小説的な道筋に沿って「成長」していくのか。

何か家族の外の世界にあるものを知り、それらをもとに自らを省みて成長していくという普通の成長物語にあるような成長は、この小説においてほとんど見られない。たとえば、赤ん坊の頃の Eugene は、直感的に以下のように感じている。

[T]he men were forever strangers to one another, that no one every comes really to know any one, that imprisoned in the dark womb of our mother, we come to life without having seen her face, that we are given to her arms a stranger, and that, caught in that insoluble poison of being, we escape it never, no matter what arms may clasp us, what mouth may kiss us, what heart may warm us. (31)

赤ん坊がこんなことを考えていると言ってしまうところが、この小説がリアリズムに則っていないと言われる原因の一つだが、この考え方は、その後小説に何度も表れ、小説の最後で強調されるものである。つまり、小説の鍵となるこの考えは、様々な経験を通して醸成されていったものではなく、最初から Eugene が持っていたものとして描かれているのである。そこに成長の感覚はない。

そして、彼は社会や他者ではなくひたすら自分の内にその探索を広げていく。小説の最後で Eugene が Ben の幽霊に言う “But in the city of myself, upon the continent of my soul, I shall find the forgotten language, the lost world, a door where I may enter, and music strange as any ever sounded” (521) という言葉が明瞭にそれを表している。これはハイモダニズムの小説家の一般的な特徴と言えるかもしれないが、Wolfe の場合は、より極端に「自分」への探索の形があらわれる。

この小説において強調されるのが、「孤独」である。Eugene は小説の終盤で、兄 Luke に “I have lived here with you for seventeen years and I'm a stranger” (420) と言うが、全編を通じて、Eugene が孤独であることが何度も示されている。しかし、この「孤独」は決してネガティブな意味ばかりを持つものではない。これこそが Eugene を最終的に旅立たせるものであり、彼のアイデンティティーを保つものであり、だからこそ、家族の中で同じく “stranger” であった Ben に彼は親近感を持っている。

これは Wolfe 自身の思いをかなりの程度で反映しているだろう。母への 1926 年 11 月 19 日の手紙において、彼はこう書いている。

I suppose in every family there's always a stranger, always an outsider. In our family Ben was the stranger until his death - I suppose I'm the other one. I shall spend Christmas alone this year, but wherever I am, I do not think I shall be more unhappy than I was at home last Christmas. (112)

このように、Ben と彼が共有していると信じていた孤独は彼にとってかけがえのないものであった。1933 年の 4 月 21 日の母への手紙において Wolfe はまた以下のように言う。

It took me fifteen years of being alone to make a life for myself and now that life is my own, for better or worse, or whether I ever have any great success or not, and no outsider is going to violate it. The privacy and obscurity of my own life is something I will defend with all I have and I will not allow people to thrust themselves into my life and claim to be my friends. (203)

このように、「孤独」こそが Wolfe の、そして Eugene の「個」の確立には欠かせない。Wolfe 自身は *Look Homeward, Angel* の原稿につけたノートにおいて、自分の小説の二つのテーマについてこう語っている。

The one, an outward movement, described the efforts of a youth to find

freedom, release, and loneliness in a new land; this was contrasted to the downward movement into the buried life of a family in its cyclic movement through genesis, union, decay, and dissolution. (*The Letters* 129)

Wolfeにとって孤独と自由は表裏一体のものだった。そしてそうやって「個」を形作っていったからこそ、彼はLukacsの批判するように、社会からも孤立したところに自己を見出そうとするようになる。⁷

しかし、この個の作り方がどうであれ、我々が注目すべきは、それがまず家族との関係の間になされ、そのあとそれ以外の関係に敷衍されていくという形をとっていることである。Eugeneの、そしてWolfeにとって重要なキーワードであった「孤独」というのは、結局のところ家族の中での孤独なのである。それが、社会での孤独と同等の意味を持つものとして書かれている。

Wolfeが示しえたEugene成長の図式とは、すなわち、他の家族の成員から距離をとろうとすることである。ひたすら距離をとっていかうとした結果、その孤立は家族からも彼を引き離す。*Look Homeward, Angel*の教養小説的構図が隠しているのは、そういうことである。このやり方だと、Eugeneの目は常に家族に向いているから、家族の外の社会と折り合いをつけていくという手続きが省かれることになる。言ってみれば、家族との距離が一番の問題である場合、それは家族に執拗にこだわっているということだから、そういう状態のまま問題なく社会に溶け込むことはできない。⁸家族の論理をそのままに家族の外の世界にも適用しようとした場合、David Donaldが指摘しているように、それは結局はそこからも背を向けることを意味する。⁹そこに一般的な意味での「成長」はない。間断のない逃走に近いようなものがあるだけである。

Eugeneの、そしておそらくWolfe自身の、個の作り方が家族との距離を基にしているということは、要するに、彼のアイデンティティを形成する一番大きな要因は、家族成員および家族自体との距離のとり方であるということだ。これは最後まで変わらない。家族以外のほかの要素がEugeneのアイデンティティ形成において果たす役割は、家族のそれにくらべてはるかに小さい。

だから、小説は、誰か家族以外の人物ではなく、あくまで家族の中でEugeneと同じく“stranger”であったBenの幽霊との対話によって締めくくられるのだ。家族の中で孤立しているというのが、Eugeneという個の基底にあるべきものなのである。Eugeneが興味を持つ家族外の人物との関係も、家族成員との関係を基にしている。家族以外の人物でEugeneと最も関係の深いMargaret Leonardは彼の“spiritual mother” (192)であるとされ、Eugeneは彼女に性的な興味を持ってはいけなないと考えている。¹⁰またEugeneは年上の女性にばかり惹かれるのだが、その中の一人のMiss Brownに対しては“incestuous pollution” (393)を感じるような関係である。

家族という構造がこの小説に枠組みを与えている。Eugeneは何かする際に、主にそ

れを参照して行動する。そして、この子供時代の家族という題材と、今の、つまり語り手たる Eugene の距離は明確ではない。それは“aesthetic distance”を欠いているという言い方で批評家たちが批判している通りである。Eugene と Wolfe をほぼ一致したものみなせば、語り手は作家 Wolfe と、子供時代の Eugene は子供時代の Wolfe にそれぞれ重ねあわされ、子供時代の家族というマテリアルの扱い方が客観的ではないという批判は双方に及ぶことになる。

Eugene が、通常の成長が示唆するような単純な時の流れを信用していないことについてはすでに触れたが、彼の過去への姿勢もまた独特のものである。Eugene は考える。

I am, he thought, a part of all that I have touched and that has touched me, which, having for me no existence save that which I gave to it, became other than itself by being mixed with what I then was, and is now still otherwise, having fused with what I now am, which is itself a cumulation of what I have been becoming. (160)

彼は過去を過去として処理しようとしていない。むしろそれを現在との密接な関連によって見ている。だから小説で描かれる子供時代とその後には、画然とした距離がない。なんらかの時期（青春など）を通過し、それによってそれ以前を過去として処理するという作業を成長と呼ぶならば、そこに成長はないのだ。

そして、距離がないからこそ、子供時代の家族の問題が表に出てくる。本来、それは、大人になるとともに過去のものとして処理されるはずのものである。そして、そこに生じた問題は無意識下にしまいこまれるべきものなのだ。ところが Wolfe の小説では子供時代の家族は今も大きな影響力をもつ枠組みであり、そして Ben は幽霊となって最後に登場してくる。*Look Homeward, Angel* は一応、教養小説の形をとっているため、最後は Eugene が家族のもとから離れる場面で終わる。だから旅立ちのシーン、「成長」したはずの Eugene にとっては、家族はもはや処理し終わっていないなければならないものである。それゆえ、Ben は幽霊なのだ。それはあってはならないのにそこにあるものだ。しかし、無意識下から人を襲う白昼夢の如き存在ではない。白昼堂々 Eugene の目の前に現れて、長時間彼と対話を交わすような、もっと質量を持った、そういう生々しい存在である。その生々しさは、Eugene にとって家族という枠組みが持つそれと同じであるに違いない。

Louis Rubin Jr. は *Look Homeward, Angel* においては Wolfe と題材の間に“temporal distance”があったが、それ以降の小説においてはそれがなくなり、それが“aesthetic distance”の欠落につながっているという説を唱えるが、たしかに“temporal distance”はあるものの、それが「距離」として機能しているかどうかは疑わしい。Wolfe はもっと密接に過去と関わりあっていただろう。彼が“The Story of a

Novel”において、いかに明瞭な形で過去のさまざまなことが自分の内によみがえってくるか説明するとき、われわれはそれを確かめることができる。

Wolfeが、家族という枠組みから離れていなかったことは、幾人もの批評家によって指摘されている。William SnyderはWolfe家の人間の特殊性や、Wolfeがいつまでも青年時代を生きたとする考え方を紹介し、¹²John BishopはWolfeの人間関係が、家族とのものに強い影響を受けていたために、家族以外の人間との関係が往々にしてうまくいかなかったことを指摘している。¹³

だからWolfeが自伝的小説という手法をとったのは、半ば必然であったろう。彼と題材、つまり小説に描かれる家族やその関係の中にいる自分との距離は非常に近いものであり、その近さにふさわしいのは自伝的手法以外にない。主人公と自分が限りなく近いものであると、描くもの描かれるものの距離、今と過去という時間的距離を等閑視してまでそれが近いと訴えることのできる手法が、彼の問題意識に沿ったものであったろう。だが、今まで見てきたように子供時代の家族からの孤独によって得られる距離こそが「個」を形づくる上で重要であるため、純然たる自伝となることもない。そこには語り手と彼の子供時代たる主人公の距離を保証するような意匠がめぐらされる。そしてこういった仕掛けは、“aesthetic distance”や“Psychical Distance”を十分にとっていないという批判をする批評家たちの意見にある程度沿うものである。だから、いろいろな形式の混交のようなWolfeの小説の中の、自伝的な要素のみ批判されるというような事態が起こる。

こういった批判は、Wolfeが過去という題材から適正な距離をとっていない、それを適正に処理していない、ということと同じである。つまりWolfeが正常な形で「成長」していない、ということだ。この「成長」への呼びかけが、たとえば前に述べたように、できるだけ自伝的な書き方を排除しようとするWolfeの姿勢へとつながっていく。Wolfeの小説群は、ある意味ではこうした「成長」への希求とそれの拒否の合間で揺れ動いていると言える。そしてそれがWolfeの小説の統一のなさを生み出した一因でもあるのではないだろうか。

自伝的小説を書くことへのためらいは処女作を書いているときからWolfeの中にあった。¹⁴そしてこのためらいは消えることなく残り続ける。Wolfeはまさにそれが自伝であり、主人公が自分であると宣言すると同時にそれは完全な自伝ではないという部分的な否定を同時に行うという難しい立場にあった。それは特にWolfeのような作家において自伝は過去と今を密につなげるものという意味があったため、「成長」という見地からは否定せねばならないという事情によっていたのではないだろうか。

また、前に、批評家たちが作家Wolfeに読み込んでいた「成長」という物語について触れたが、こうした「成長」への要請をWolfeが敏感に感じ取っていたのも事実である。¹⁵こうした言ってみれば外的な圧力はよけいにWolfeの創作における矛盾した動きを際立たせていくことになっただろう。

Wolfeの小説の統一性の欠如はまた別の側面から考えることもできるだろう。何かに

統一された全体像を与えるような「距離」が、Wolfe と子供時代の家族という題材の間には欠けていたのである。彼は、家族という枠組みの中にとらわれ、その家族のことを書こうとしたとき、それを対象化することができなかった。部分的にはできたかもしれないが、内部にいるものが、全体を対象化する視点を持つことはできない。いきおい、小説は、内部にいるものがやみくもにその全体を知ろうと格闘するその記録のような性格を持つことになる。¹⁶

Eugene は、兄 Luke に反発し、こう考える。

[Luke] lived in a world of symbols, large, crude, and gaudily painted, labelled “Father,” “Mother,” “Home,” “Family,” “Generosity,” “Honor,” “Unselfishness,” made of sugar and molasses, and gummed glutinously with tear-shaped syrup. (98)

逆に言うと、Eugene は“symbol”や“label”ではない部分で家族を考えようとしているということだ。そのように一つの全体を与えられ、安定化した概念ではなく、ある対象を分析する際に求められる距離など無視してそれを描ききろうとする格闘が、*Look Homeward, Angel* に力を与える。

Wolfe が“The Story of a Novel”において、以下のように言うとき、Oscar Cargill はこの“father”とは Wolfe が追い求めていた“artistic integrity”のようなものであったと指摘するが、私も同意見である。

[T]he deepest search in life, it seemed to me, the thing that in one way or another was central to all living was man's search to find a father, not merely the father of his flesh, not merely the lost father of his youth, but the image of a strength and wisdom external to his need and superior to his hunger, to which the belief and power of his own life could be united. (18)

自伝的であった彼の小説において、人生が“united”になることを可能にするような「父」とは、文学にも統一をもたらすものということであろう。そして父とは、家長であるべきものである。*Look Homeward, Angel* においても、父 W.O. Gant が病気を患い死へと向かっていくのをきっかけにして、家族がまとまりを失っていく。父が家族を代表するものならば、Wolfe の求めていた父とは、家族の、そして作品の unity を保証するものだったのではないだろうか。つまり、家族と作品の unity は相互に関係しあうものになる。これは *Look Homeward, Angel* が、まさに家族についての小説であることを考えれば不思議ではない。Wolfe の手紙は、“search to find a father”というのは Maxwell Perkins が、Wolfe の短いエピソードの集積に対して、あるプロットを与える

ために提案したものの一つであったことを明らかにしているが (*The Letters* 287)、これも作品の *unity* と家族とが関わっていることを裏付ける。Wolfe は、作品の、そして家族の *unity* を求め、しかし、それはある距離をおいて全体を把握しないとかなわないことであったがために、ついにそれを手に入れることはかなわなかったのだ。しかし、それが Wolfe の終生の課題として残る。ここで Wolfe は、彼を批判する批評家たちと基本的には同じ姿勢であったと言えるだろうが、彼の資質が、そうなることを許さなかった。彼はずっと家族の内部で、家族をどうやって対象化し、統一を与えた形で描きうるのか、考え続けるしかなかったのだ。

「成長」への要請は *Look Homeward, Angel* に教養小説的要素を与え、Eugene を、そして Wolfe を過去や家族から決別させようとする。それは批評家や、彼らが依拠する社会的、文学的規範や、あるいは Wolfe 自身が Perkins に求めたような彼自身が自らの欠如とを感じるようなものと深く関わる要請であっただろう。これが Wolfe を、過去や家族にこだわった自伝的小説から遠ざけた要因であろうということは既に述べた。しかし、そうやって彼が遠ざかろうとしている「未熟」な部分は、同時に小説の提示する問題意識と切り離せないものである。この「成熟」と「未熟」の葛藤は、*Look Homeward, Angel* において最も明瞭に表れ、それが、この小説に興味深い一側面を付け加えているのではないだろうか。

註

¹ 2000年に *Look Homeward, Angel* が編集される前の原稿を再現した *O Lost: A Story of the Buried Life* が出版されたが、本論では *Look Homeward, Angel* について論ずる。実際に多くの人々に読まれ、批評されてきた小説が編集済みのものであるということもあるが、なにより編集者が Wolfe とともに編集を加えた原稿が持つ意味について考えることもこの論の一つの目的だからである。Wolfe の当時の手紙は、彼が嫌がるどころかむしろ編集者 Perkins の提言に喜んで従っている様子を示している。また手紙が示すように彼は第二作 *Of Time and the River* 執筆の際には、小説をまとめるために Maxwell Perkins に頼っている (*Letters* 398)。したがって私は、こうした編集が Wolfe が当時抱えていた問題への解決を示すものと作家、編集者の双方から考えられていたという点に着目し、そうした期待をもとに成立した小説がどのようなものであるか考えていきたい。

² “After the war, the South again knew the world, but it had a memory of another war; with us, entering the world once more meant not only the obliteration of the past but a heightened consciousness of it” (83).

Hugh Holman は “The Web of the South” において、その他、題材の大きさなどについても、Wolfe と他の南部作家たちとの共通点を指摘している。

³ “On its publication in 1940, *You Can't Go Home Again* was joyfully received in some quarters as long awaited evidence that Thomas Wolfe had at last matured. It was this book, not *The Web and the Rock*, which discharged his promise of objectivity”

(106).

そして Walser 自身も次のように後期 Wolfe に成長を見て取っている。

While it is difficult to define literary maturity, and it is speculative, certainly, to attest whether maturity is always desirable, no one can deny Wolfe's shift in emphasis. Like a scholar, George Webber began to see relationships and associations and resemblances in all aspects of life...Instead of nursing a passionate solicitude for himself, Webber had thoughts and eyes always turning outwards. (106)

⁴ Hugh Holman は “aesthetic distance” (*The Loneliness* 14) と言い、Morris Beja は “Psychical Distance” (48) と言っているが、両方とも基本的には作者と題材および主人公との距離を問題にしている。

⁵ Lukacs がこの論文において具体的に批判している数少ないアメリカ作家の一人が Wolfe であるというのは興味深い。

⁶ “When Wolfe prepared to write a second long work, he determined not to use the autobiographical time scheme for control because too many acquaintances, editorial friends, and reviewers had implied that this was the mark of an apprentice” (*The Window* 64).

⁷ この小説において個の問題が普遍の問題とされる傾向があるということについてはすでに触れたが、「自分」の問題に沈潜していく語り手は、身の回りの社会を考慮せずいきなり個の問題をアメリカ全体の問題に接続しようとする。社会に背を向けるという個の形作り方をしている以上、それは避けられないことだっただろう。たとえば、*Look Homeward, Angel* の 29 章では、“Within its hills he had been held a prisoner; upon its plain he walked, alone, a stranger” と Eugene のことについて語った直後、次のように、いきなりそれをアメリカ全体の問題に結び付けている。

O God! O God! We have been an exile in another land and a stranger in our own.... And the old hunger returned - the terrible and obscure hunger that haunts and hurts Americans, and that makes us exiles at home and strangers wherever we go. (352)

⁸ たとえば、休みの間に自分一人で旅をして金を稼ぎ、“He had lived alone, he had known pain and hunger, he had survived” というまさに自分が自立したというような感慨を抱いたあとに、Eugene は即座に家族のことを考える。そして “My God! Am I never to be free? . . . What have I done to deserve this slavery ?” (440) と憤る。イニシエーション的な体験をした後にさえ、家族は彼に非常に身近な問題としてつきまとっている。

⁹ “By the author's own admission [*Look Homeward, Angel*] was an autobiographical work, a novel of development, a story of how a young artist found himself in spite of all the obstacles his family and his society put in his way” (178).

¹⁰ Margaret との会話のあと、Eugene は以下のように感じている。

The proud words of love and glory sank like music to his heart, evoking their bright pictures of triumph, and piercing him with the bitter shame of his concealed desire. Love bade him enter, but his soul drew back, guilty of lust and sin. (326)

¹¹ Eugene は "[Eliza] fed me at her breast, I slept in the same bed with her, she took me on her trips. All of that is over now, and each time it was like a death. . . . And you will die a hundred times before you become a man" (482)と、「成長」の段階をその都度死んでよみがえることになぞらえて考えている。つまり、「成長」を印づけるような境界線は彼にとって生死の境界にも似ているのである。Ben はいわば、Eugene が「成長」し、処理し終えたと思っていた死の世界にあるものたちからの来訪者である。

¹² "Characteristically, their relationships with outsiders were carried out within the limits of the roles that had been assigned them by the family. For each family member felt that he could not survive apart from the family unit, nor it without him. Tom had the role of baby of the family, Fred that of the favorite boy. W.O. had the role of irresponsible philanderer . . ." (108).

"Even Miss Nowell, who hardly said an unkind thing about Wolfe, describes him as a person who experienced a very prolonged adolescence. She feels that he only moved into adulthood at the age of thirty-seven, the year before his death" (119).

¹³ "The only human relationship which endures is that of the child to his family. And that is inescapable: once having been, it cannot cease to be. His father is still his father, though dying; and his brother Ben, though dead, remains his brother . . ." (94).

¹⁴ *O Lost* を出版社に送った際に付けたメモでの自分の小説についての Wolfe の言葉、"it is probably no more autobiographical than 'Gulliver's Travel'" (*The Letters* 130) は彼が自伝的小説という形式にある種の引け目を感じていたことを示している。

¹⁵ Wolfe の *Of Time and the River* 執筆以降の Perkins への手紙は彼が DeVoto などの批判をかなり気にしていた様子を伝えている。Wolfe は彼が Scribner との契約を打ち切り Perkins と別れる理由を、彼が Perkins の助けなしには小説を書けないという批判を受けてのものだとしている (*The Letters* 556)。

¹⁶ Wolfe 自身も、何かを知るためにはまずそれから離れなければいけないと "The Story of a Novel" において述べている。"I had found out during these years that the way to discover one's own country was to leave it; that the way to find America was to find it in one's heart, one's memory, and one's spirit, and in a foreign land" (16).

参考文献

Beja, Morris. "The Escape of Time and Memory." *Thomas Wolfe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987, 29-58.

- Bishop, John. Peale. "The Sorrows of Thomas Wolfe." *The World of Thomas Wolfe*. Ed. Hugh Holman. New York: C. Scribner, 1962, 92-95.
- Cargill, Oscar. "Gargantua Fills His Skin." *Thomas Wolfe: Three Decades of Criticism*. Ed. Leslie Field. New York: New York University Press, 1968, 3-16.
- Clements, Clyde. C., Jr. "Symbolic Patterns in *You Can't Go Home Again*." *Thomas Wolfe: Three Decades of Criticism*. Ed. Leslie Field. New York: New York University Press, 1968, 229-240.
- Cowley, Malcolm. "Thomas Wolfe." *The World of Thomas Wolfe*. Ed. Hugh Holman. New York: C. Scribner, 1962, 167-174.
- Donald, David. Herbert. *Look Homeward: A Life of Thomas Wolfe*. Boston: Little, Brown. 1987.
- Holliday, Shawn. "The Story of a Tall Man: Thomas Wolfe and the Problems of Literary Iconography." *The Thomas Wolfe Review*, 30, 5-18.
- Holman, Hugh. C. *The Loneliness at the Core: Studies in Thomas Wolfe*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1975.
- . "The Web of the South." *Thomas Wolfe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987, 99-122.
- Kennedy, Richard S. *The Window of Memory: The Literary Career of Thomas Wolfe*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1962.
- . "Wolfe's Fiction: The Question of Genre." *Thomas Wolfe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987, 59-78.
- Lukacs, Georg. "The Ideology of Modernism." *20th Century Literary Criticism*. Ed. David Lodge. New York: Longman, 1972, 474-488.
- Perkins, Maxwell. E. "Thomas Wolfe." *The World of Thomas Wolfe*. Ed. Hugh Holman. New York: C. Scribner, 1962, 42-44.
- Robert C. Slack. "Thomas Wolfe: The Second Cycle." *Thomas Wolfe: Three Decades of Criticism*. Ed. Leslie Field. New York: New York University Press, 1968, 105-122.
- Rubin, Louis. D., Jr. *Thomas Wolfe: The Weather of His Youth*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1955.
- . "Thomas Wolfe: Time and the South." *Thomas Wolfe: Three Decades of Criticism*. Ed. Leslie Field. New York: New York University Press, 1968, 59-84.
- Snyder, William. V. *Thomas Wolfe: Ulysses and Narcissus*. Athens: Ohio University Press, 1971.
- Tate, Allen. "*The Fugitive 1922-1925*: A Personal Recollection Twenty Years After." *The Princeton University Library Chronicle* 3.3 (April 1942), 75-84.
- Walser, Richard. *Thomas Wolfe: An Introduction and Interpretation*. New York: Barnes & Noble, 1961.
- Wolfe, Thomas. *Look Homeward, Angel*. New York: Scribner, 1929.
- . *The Letters of Thomas Wolfe*. Ed. Elizabeth Nowell. New York: Charles Scribner's Sons, 1956.
- . *The Letters of Thomas Wolfe to His Mother*. Ed. Hugh Holman and Sue Fields Ross.

Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1968.
トッド、E. 『世界の多様性：家族構造の近代性』 萩野文隆訳、藤原書店、2008年。